

「進め」

代田小・4 芝野 桔平

四月の初め、ぼくは新しいクラスになり、係を決めることになった。ぼくたちのクラスには、国語係や理科係など、それぞれの教科の係がある。教科係は、その教科のじゅ業の時に、自分のつくえとイスを教室の前にもって行って、その時間に行うことや、めあてをみんなに伝えたり、話し合いの司会をしたりして、先生のようにじゅ業を進めることになっている。国語係や体育係、道徳係などいろいろな係がある中、ぼくは算数が好きなので算数係になることにした。算数はむずかしい問題をとく楽しみがあり、必ずはつきりとした答えがあるからぼくは好きだ。算数係をやると決めただけで、ぼくは本当にじゅ業を進められるか不安だった。係のことを考えると足がふるえそうになった。

算数係としての初めてのじゅ業が始まるようになっていた。算数係として、教室の前に出てみんなを見たらむねがどきどきして、とてもきんちようした。けれど、ぼくのとおりにはもう一人の算数係のえいすけ君がいたので心強かった。

じゅ業が始まった。ぼくたちの初めてのじゅ業は「九九うらない」だった。まず先生に「めあてを決めるために二分タイマーを計って。」

と言われて計った。次に

「発言した人のネームプレートをはって。」

と言われてはった。そのあとも、先生から指示されたことをそのとおりに行うことしかできなかった。自分たちで考えて行動することができず、先生に全てを助けてもらってしまっていた。ぼくたちが指じさねずにできたことは一つ。それは、手をあげている人を指名することだけだった。これくらいしかできなかった自分になんとも言えない気持ちになった。じゅ業を進めることがこんなにむずかしいなんて思わなかった。もつとできると思っていたのに。

そのあと、国語係さんのじゅ業が始まった。国語さんは先生に何も言われていないのに、自分たちで黒板を使いだしていた。ただ出てきた意見を黒板にならべて書くだけでなく、みんなが分かりやすいように、整理して書いていたのである。先生にたよらず自分たちでじゅ業を進められていた。ぼくたち算数係と国語係さんの差が大きすぎて、ぼくはがくぜんとした。国語さんがす直にすごいと思った。ぼくは、このままじゃだめだと強く感じた。

算数のじゅ業をよくするために、いっしょに算数係をやっているえいすけ君に相談した。二人で話して、まずは国語係さんのいいところをまねしてみようということになった。算数のじゅ業で手をあげている人を指名することだけでなく、国語係さんのように、黒板を使ってより分かりやすく伝えられるようにしてみた。少しじゅ業がうまく進んだ気がした。でもまだまだだ。これじゃあ国語係さんのまねをして国語係さんに追いついただけ。みんなよりもつと上手にじゅ業を進めたいと思った。

次の作戦は、じゅ業が始まる前に先生にじゅ業の内ようを聞くことにした。これを行うことによって、じゅ業中に先生にたよらず、自分たちで考えて行動することができると思った。この作戦は大成

こうだった。先生に、

「今日は何ページをやりますか。」

と聞いて、そのページで学習する内ようを黒板に書いたり、めあてを考えてみんなに伝えたりした。ふく習の時間には、先生に聞いたページの問題だけでなく、自分たちで考えた練習問題をつけ加えてみんなに出したりした。先生に一度もたよることなく、初めてスムーズにじゅ業を進めることができたという手ごたえを感じることができた。じゅ業がうまく進むようになって、ぼくはうれしくなった。

先生にもほめられてとつてもうれしかったし、ますますやる気が出た。二十分放課がいつもいっしゅんで終わってしまうように、算数の四十五分のじゅ業も、楽しくていっしゅんで終わるように感じた。

不安なことがあつてもいろいろ考えて、自分で行動することが大事だと思った。そうすると見方が変わって、不安だと思っていたことも楽しくなる。ぼくもだんだんじゅ業が進められるようになって、算数のじゅ業中、先生のようになれてほこらしい気持ちになった。

そして自分に自信がもてた。これからもよく考えて行動し、自分から進んでいくことで成長していきたい。まよわず進め。